

令和3年度 S特選コース

第2回 入学試験問題 (2月2日 午後)

国語 (50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

□ 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、恩に報いる。
- 2、僧が寺にこもって勤行する。
- 3、辞書で派生語も確かめる。
- 4、声色をまねる。
- 5、魚河岸に仕入れに行く。
- 6、スミやかな対応を心がける。
- 7、表彰の候補者に名をツラねる。
- 8、権力をコウシする。
- 9、時間をツイやして完成させる。
- 10、ユウコウ期限を確かめる。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

補聴器を手にした老人は、あたかも、「盗聴器をしかけたスパイ」のような気持ちになった。

——嫁が自分の悪口を言っている決定的な証拠をつかんでやる。
心の中でそうつぶやくと、彼は、意地の悪い笑みを浮かべた。

老人は、会社勤めをしている息子とその嫁、そして三人の小さい孫たちと暮らしていた。彼の耳はだんだんと遠くなり、このところ家族の音があまり聞こえなくなっていた。

ずっとつれ添ってきた妻に先立たれてからというもの、老人はすっかり元気をなくし、加えて耳が聞こえにくくなったことが、彼の性格を少しずつ卑屈ひくで頑固なものに変えていった。耳が遠くなると、自分の話す声も自然と大きくなる。大きな声は怒鳴り声のように聞こえ、周囲を萎縮いしやくさせてしまうことも、家族との距離が生まれた原因だった。

——わしが弱ってきたのをいいことに、家族がわしを邪魔者扱いし始めておる。

息子の嫁に対して、老人は、特に強い敵意を感じていた。

家族は何やら楽しげに話をしているのだが、その内容はちっとも聞こえない。しかし、おそらく自分のことを笑っているだろうことはわかった。そろって夕飯を食べているときも、息子夫婦と孫たちは、なにやら話をしては笑っている。皮肉なことに、会話の中身は聞こえなくても、かんたか甲高い笑い声だけは、この遠くなってしまった耳に聞こえてくるのだ。

——わしの耳が聞こえんのを知った上で、堂々と悪口でも言っているに違いない。

たまに嫁が自分に話しかけてくるときは、決まって耳元で大声を出した。

「今日の、ゴハンは、どうですか？」

まるで馬鹿にされているようで、老人はこの問いを無視し、返事もしなかった。耳が遠くなったとはいえ、ちゃんと歯はある。食べることもできる。ボケてもいない。それを知っていて、あの嫁はわしを年寄り扱いして、心の中で笑っているのだ。

音は感じづらくなったが、昼間、老人が一人で部屋の中にいるとき、背後に嫁の気配や視線を感じるがあった。^①部屋の前をゆつくりと通り過ぎながら、こちらの様子をうかがっているようだ。このわしを疎ましく感じているに違いない。そして夜になると、息子や孫たちに悪口を言っているのだろう。

仏壇の前に座ると、老人は亡き妻に話しかけた。

「年を取るといのは、寂しいものだ。体が衰えてくると、気持ちまでふさいでしまう。今となつては、ぼつくりとあの世へいつってしまったお前が、うらやましいくらいじゃ」

はあ、と老人はため息をついた。

「気持ち弱ると、体も弱っていく。この耳、わしと同じように、すっかりオンボロになってしまった」

——なんでわしが、こんな思いをしなくてはならないのか。

すべてあのいじわるな嫁のせいだ。ふと、老人はある計画を思いついた。

耳が聞こえないと思っている嫁は、わしの悪口を言っているに決まっている。この耳が、突然聞こえるようになったとしたらどうだろう。腹黒い嫁の、しつぽをつかまえてやる。

②老人は、補聴器を買うことにしたのだ。補聴器は駅前大きなメガネ屋で扱っているようだった。

老人が補聴器を求めていることを知った店員は、耳元で、大きな声でゆつくりと説明をした。

「まず補聴器には、もつともポピュラーな耳かけ型、操作のしやすいポケット型、また音声を振動で伝えるメガネ型などがございまして……」

「詳しいことはわからん。ただ、^③できれば、外から、補聴器をつけていると分からないものがないんだが」
「はい、それでしたら耳あな型になりますね。こちらは文字通り、耳の穴の中にすっぽりと入れて使いますので、まったく目立つものではない
ません」

(中略)

「うむ、あまり難しい説明をされてもよく分からん。ただ、その、耳あな式というのを、一度、試してみることはできるのか？」

「オーダーではなく既製品でしたら、まずは三日間、お試しということでご使用いただくことができます。快適な補聴効果を、きつと実感いただけるかと……」

こうして老人は使い方を店員に教わり、耳の中に **A** 補聴器をつけたのだ。意地の悪い笑みを浮かべながら。

夕方。静かに玄関を開けて家に入ると、すでに仕事を終えて帰宅した息子に、キッチンで嫁が話しかけている声が聞こえた。補聴器の効果はバツグンだ。以前なら、まったく聞こえなかった声はつきりと聴きとれる。

「あら、もう六時。そろそろ夕飯の準備をしなくちゃ」

一瞬、「もうろくじじい」と聞こえたが、高性能の補聴器のおかげで、飛び出して怒鳴りつけずにすんだ。老人は胸をなで下ろし、さらに ^④ 聞き耳を () 。決定的な瞬間をとらえて、すかさず怒鳴りつけてやるのだ。

「だから、夕飯の時間くらい、お義父とうさまの好きな番組を観せてあげましょ。子どもたちの観たい番組は、ちゃんと録画してあるから大丈夫。ご飯の時は、子どもにとって興味の無いテレビがついているくらいでいいのよ」

わしが観る番組は、つまらんものばかりで悪かったな。そう思ったが、まだ飛び出すほどの場面ではない。子どもにもテレビを観せてやれと主張していたらしい息子も、嫁の話聞いて、「それもそうだな」と言っていた。

「それでね、あなた、お義父さまの話なんだけど。お義母かあさまが亡くなってから、すっかり元気がなくなっちゃったでしょう？ 元気を出してもらいたくて、子どもたちにも言ってる、なるべく笑い声が多い家庭にしてるんだけど……」

「おふくろが死んだことで、家じゅうバタバタしていたけれど、言われてみればそうだな。たしかに親父のこと、あまり考えてなかった」

「それまでは、おいしいおいしいって私の料理も食べてくださっていたのに、今は無言でお食事なさっているでしょう？ お口に合わないのかどうなのか、分からなくて……」

「本人に聞いてみればいいじゃないか」

「そうしてみたんだけど、^⑤ お返事がなかったの。お義母さまが亡くなられてから、耳も遠くなっているみたいなの」
カチャカチャと食器の音がする。夕飯を作りながら、なお二人の会話は続いていたが、いつまでたっても、なかなか自分の悪口は出てこない。

老人はさらに、壁の向こう側から、B 一步キッチンに近づいた。

「耳が遠いことは、お義父さまにとつても、つらいことだと思うの。お義母さまがいなくなつて、ただでさえ寂しいのに、子どもたちとも話がでないじゃ、あんまりだわ」

高性能の補聴器は、嫁の涙声のような小さな音まで拾う。確かに、自分の耳が遠くなつてからというもの、孫たちも自分に話しかけてはこなくなつていた。それが、老人には寂しかった。なぜそれを、あの嫁が知っているのか。

「あなたはいつもお義父さまに行っているけれど、私はお義父さまとひとつ屋根の下で一緒に生活をしているから、なるべく分かつてあげたいと思つているの。だから今のお義父さまのことは、あなたより知つてゐるつもりよ」

いつも陰からわしを見ていたのは、そういうことだったのか。

「じゃあ、どうするんだ？ 親父の耳が悪いせいで、キミがストレスをためるのもいいことじゃないよ」

老人の耳がピクリと動いた。我が息子は、親よりも自分の妻を大事に思つてゐるのだろうか。

——まさか、やっかいもの厄介者のこのわしに一人暮らしをさせるつもりか……？

しかし、夫の言葉に嫁ははつきりと答えた。

「私は全然大丈夫よ。それより、お義父さまが元気を失くしてしまったのは、耳が聞こえにくいせいもあると思うの。それでね、私、駅前のメガネ屋さんで聞いたんだけど、今はデジタル式のいい補聴器があるんだつて。オーダーメイドだと少し高いんだけど、それをお義父さまにプレゼントしようと思つてゐるの。いいかしら？」

それを聞いた息子が明るい声で言った。

「そうしよう。きっと親父も喜ぶよ」

「もしかしたら、恥ずかしがつていやがるかもしれないけれど、おすすめてみるわ。貯金を使って、みんなで節約すればなんとかかなりそうなの。家族みんなからのプレゼントなら、きっとお義父さまも使ってくれるわ」

二人にばれないよう、老人はそつとその場を立ち去り、部屋に戻つていった。

翌日、老人はメガネ屋に行った。

「これは返すよ」

「1」

「2」

だとすれば、一日使つただけで、すっかり気に入つたに違いない。店員はそう確信して老人に尋ねた。

「
3
」
「
4
」

やはりそうだ。お買い上げ、ありがとうございますと、心の中で店員は叫んだ。

「では、ご購入いただけるということで、さっそくお耳の方のサイズを測らせていただいでよろしいでしょうか？」

しかし老人の答えは、思っていたものではなかった。

「いや、今日のところはこれは返して、帰らせてもらう」

なぜ、と問いかける店員の言葉は、補聴器をはずした老人には聞こえていなかった。しかし、^⑥老人は力強い声で言った。

「だが、近いうちにまた来るよ。必ずな」

(桃戸 ハル 「補聴器」より)

問 一、——線①「部屋の前をゆっくりと通り過ぎながら、こちらの様子をうかがっているようだ」について、次の各問いに答えなさい。

1、このような行動をとった人物は誰ですか。文章中から探し、抜き出して答えなさい。

2、その人物が、このような行動をとったのはなぜですか。その理由が端的にわかる一文を文章の会話の中から探し、最初と最後の五字をそれぞれ抜き出して答えなさい。ただし、「」は字数に含めません。

問 二、——線②「老人は、補聴器を買うことにしたのだ」とありますが、それはなぜですか。その理由を文章中の言葉を使って三十字以内で答えなさい。

問 三、——線③「できれば、外から、補聴器をつけていると分からないものがないんだが」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、自分の卑屈さや頑固さを改めようと試行錯誤していることを悟られるのが、恥ずかしかったから。

イ、家族に、本当は耳が聞こえにくいことを気にしているのだと思われるのがいやだったから。

ウ、自分に対する嫁の悪口を聞くためには、耳が聞こえるようになったと知られると不都合だから。

エ、詳しい説明を聞いてもよくわからないので、実際に装着して試せる耳あな型がよかったから。

問 四、

A

・

B

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、そうっと イ、こつそりと ウ、ふっと エ、さっと

問 五、——線④が「注意を集中してよく聞こうとする」という意味になるように、()にあてはまる言葉を二字で考えて答えなさい。

問 六、——線⑤「お返事がなかったの」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、明るい雰囲気づくりに励む嫁を、困らせてやろうと思ったから。

イ、何かと干渉してくる嫁を無視して、困らせてやろうと思ったから。

ウ、余計な気遣いをされることが無念で、返事をしたくなかったから。

エ、見下されていると思えば不快で、返事をしたくなかったから。

問七、

1

→

4

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、ご使用されてみて、いかがでしたか？

イ、お試し期間はまだ二日ございますが……なにか不具合でも？

ウ、ああ、とっても気に入ったよ。オーダーメイドなら、もっと具合がいいに違いないだろうな

エ、いや、そんなことはない

問八、——線⑥「老人は力強い声で言った」とありますが、このときの「老人」の「声」の「力強」さは何に起因すると考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、現在の家族の本音を、こっそり知ることが出来た自分に対する誇りと満足感。

イ、思いがけず自分を尊重し、気遣ってくれる家族に対する信頼と安心感。

ウ、思った以上に、家族から頼りにされていると知ったことからくる興奮と充足感。

エ、快適に生活するための、金銭的心配は不要だと知ったことからくる余裕と安堵感^{あんど}。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たちの心というのは常に安定しているわけではない。誰しもが、悲しんだり、喜んだり、怒ったり、泣いたり、さまざまな「心のゆらぎ」を抱えている。ここではまず、この「心のゆらぎ」につけ込むタイプのを、第一種ニセ科学として分類しながら説明していこう。

この第一種ニセ科学には、占いや超能力、あるいは疑似宗教と呼ぶべきものが属する。ここでいう疑似宗教というのは、宗教のようで宗教でないもの、すなわち宗教に似せた別の代物のことだ。このジャンルは一見すると、「ニセ科学」という科学的な分類には入らないと思うかもしれない。しかし、「なぜ怪しげな宗教に引つ張り込まれるか」という仕組みの部分に、実は科学的な領分が存在しているように、科学と関係があるのだ。

例えば、私たちには未来がどうなるのかわからない。わからないからこそ、不安におびえ、ゆらぎ、知る術すべを与えてくれるものを求めてしまう。また、自分ではどうすることもできない悲しみや苦しみがあったとき、その苦痛を払いのける方法を教えてくれるものがあってしまう。占いやおみくじに頼る現象は、^①その典型的な例と言える。もちろん、人によっては、占いやおみくじによって迷いを吹っ切って安心を得ることで前向きになれるというケースもあるから、個人の趣味レベルにとどまっているうちは問題ない。しかし、それが個人の枠をはみ出し、すべての人間に適用できると勘違いすることで、他人の運命や人生まで左右するようになってしまおうと大変危険である。

実は、「血液型」の例もここに属する。結論から言えば、血液型は人間の性質を本質的に決めていたものではない。これはさまざまな研究においてすでに明らかにされていることだ。実際、血液型で性格を気にするのは日本と韓国だけ。他の国々では話題にもならないし、そもそも人間をたった四種類に分類することなど不可能であるのは^②自明の理である。ちなみに一般的には知られていないが、血液型というものは細かく分類すると、最低でも五〇種類にのぼる。本当に性格を決定づけるという科学的根拠が存在するなら、五〇種類に分けて説明していかなくてはならないはずだ。つまり、簡略化すれば四種類に集約できるという側面が、占いに都合よく利用されているにすぎない^③のである。

こういう血液型占いをゲーム感覚で楽しんでいるうちはいい。しかし驚くべきことに、とある企業において、血液型に応じて社員を採用したり、社内のチーム編成を行うということが起きてしまった。^③血液型によって人を分類し排除するという、恐ろしくもバカげたことが、一部で実際に行われているのである。これは人間が持つ本来の可能性を摘み取ることにほかならない。血液型にかぎらず、名前も誕生日も生まれ年も、本人の力とは全く関係のない^④ところで決まるものである。人生というものは、自分自身の努力や熱意によって決まるもの。だから外側から勝手に貼られたレッテルなどまったく気にする必要などない^⑤。自分のこれまでの生き方を内側から省みるほうがよっぽど有益だ。

それから、いわゆる「超能力」というもの。オーラとかテレパシーといったものがその代表的な例といえる。さらに、気や霊といったものを信じる人もいる。また例えば、道具も何も使わずに遠方の人と会話ができる。これらはある意味、現代科学を否定するところに端を発している。簡単に言えば、「すべてが科学で説明されているわけでは^⑥ないのだから、こういうことがあってもいいだろう」という主張である。つまりオーラや

テレパシーの力を標榜する人々は、科学を超えた「超科学」がそこに存在すると言いたいのだ。

ところが、実はそういった超科学の主唱者が述べている内容は、数々の実験や理論の積み重ねと裏打ちによってすでに解明されている範疇(注)はんちゆうのものばかりであり、その主張はすべて過不足なく否定されている。彼らは心や精神の世界が物質で表せないことを利用し、「未解明の科学」と称することで、現実世界から目を背けたいという人々の無意識の願望につけ入っているにすぎないのである。

そして、第一種ニセ科学の中でもとりわけ厄介(やくかい)なのが疑似宗教。誤解しないように言っておくが、これは宗教一般を指すものではない。本来の宗教というものは、心の悩みを受けとめ、いかに健全に生きるべきかということを教えてくれるものだ。ところが、中には「〇〇すれば金持ちになれるぞ」といった、物質的な利益に絡めて教義を説く怪しげなものがある。これが疑似宗教である。当然のことながら、本当の宗教というものは、**A**とは無関係のもののはずだ。

この疑似宗教の問題は、現世の利益・不利益を振り回したり、「たたり」といった言葉を使って脅迫や洗脳を用いることで、信奉を強要してしまう点にある。それがどれほど危険なことであるかは、君たちにも充分わかるだろう。

こうした「心のゆらぎ」につけ込むニセ科学に対抗するうえで、知っていて非常に役立つのが「**平均への回帰の法則**」だ。これは統計学的な現象としてきちんと認められているものだ。

人間の心も含め、この世の事象というものすべて、一定の安定した状態では進まない。上がったり下がったり、山・谷・山・谷の波を繰り返しながら、平均のラインを常に上下している。**B**、学校のテストの得点というものを思い浮かべてほしい。平均の上だったり、下だったり、いつも同じ平均点を取るわけじゃない。問題が難しいときもあれば、易しいときもあるし、身体の調子のいいときもあるし、悪いときもある。そういうさまざまな要素を含みながら、上下を繰り返し、結局は平均の数字に回帰するのだ。実際に、中間試験で特別に高得点だった学生たちに注目して調べると、一般的に期末試験では中間試験のときよりは平均点により近いという結果になる。それは、中間試験で働いたさまざまな偶然が、期末試験では必ずしも働かないからだ。

君たちのご両親や学校の先生の中には、「褒めると成績が下がり、叱ると上がる」というジンクスを信じている人もいるかもしれないが、当然ながらこれは誤りである。褒める場合というのは、いつもの状態より上の成績を取った場合だと思われるが、平均回帰への法則に従えば、その次の成績は多かれ少なかれ以前よりも下がる場合が多い。**C**、この法則を知らないと、成績が下がったという現象を「褒める」という行為の結果だと誤解してしまうのだ。これは「叱る」場合と同じである。叱る場合というのは、いつもの状態より下の成績を取った場合なのだから、その次の成績は必ず上がることになる。

この点に留意しながら、今度は「幸運グッズ」と呼ばれるものについて考えてみよう。私たちが幸運グッズを買うタイミングというのは、「最近ラッキーだな」と感じるるときよりも、何か悩み事を抱えていたり、困ったことが起きたときのほうが圧倒的に多いのではないだろうか。つまり、

どちらかといえば自分自身が「幸運でない」と思う状況で、すがりたい気持ちでそれらのグッズを買う。D、しばらくして幸運が舞い込む。それを「幸運グッズのおかげだ」と思い込んでしまう。

このカラクリ、今ならもう君たちにもわかるはずだ。そこで舞い込んできた幸運は、もちろん購入したグッズのおかげではない。単に平均への回帰の法則に従って、マイナスに偏った値からプラス方向に引き戻るという当たり前の現象が起きたにすぎない。E、不運も幸運も、平均からのズレなのである。どちらかにズレた後は、必ず平均へと戻る。その差異が、人々に「幸運」と「不運」という概念で把握されているだけなのだ。だから不運の時期の後には必ず幸運がやってくる。幸運グッズなど買わなくても、少し我慢していれば、やがて幸運がやってくるのである。「ゆらぎ」というものがすべての人間に存在する以上、プラスの出来事もあればマイナスの出来事もある。プラスがあったときは足元をすくわれないように心を引き締め、マイナスがあったときは、やがてプラスに転じるまで頑張ればいい。良いことも悪いこともいつまでも続かないということ。Fに銘じた上で、振り回されずに常に努力していれば、大きな「心のゆらぎ」につけ込まれてしまうこともない。つまり、第一種二セ科学に騙されずに済むというわけだ。

(池内了「それは、本当に『科学』なの？」より)

(注1) 「標榜」……主義・主張などをはっきりと掲げ示すこと。

(注2) 「範疇」……同じような性質のものが含まれる範囲。

問 一、——線①「その」が指し示す内容を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

未来がどうなるのかを

1、三字

や、

2、十五字

苦痛を払いのける方法を教示してくれるものにすがってしまうこと。

問 二、——線②「自明」とほぼ同じ意味を表す言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、誤解されやすい。

イ、難しくない。

ウ、言うまでもない。

エ、仕方がない。

問 三、——線③「血液型によって人を分類し排除するという、恐ろしくもバカげたこと」とありますが、筆者が「血液型によって人を分類し排除する」ことを「バカげたこと」とするのはなぜですか。その理由として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、本人の力ではなく外側から決めつけられたものによって、本来の可能性を奪うことになるから。

イ、細かく分類すると五〇種類にもなる血液型を、たった四種類に分類することは不可能だから。

ウ、簡略化すれば四種類に集約できる血液型は、占いやゲームを楽しむために利用するものだから。

エ、血液型が人間の性質を決めているわけではないのに、それを人選の基準や条件にしているから。

問 四、——線ア～エの「ない」の中から他と品詞の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問 五、——線④「無意識の願望」とありますが、これを端的に言い換えた言葉を文章中から七字で探し、抜き出して答えなさい。

問 六、Aにあてはまる言葉を文章中から六字で探し、抜き出して答えなさい。

問七、B C D E にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---------|--------|--------|-------|
| ア、B—例えば | C—すると | D—ところが | E—つまり |
| イ、B—例えは | C—ところが | D—すると | E—つまり |
| ウ、B—つまり | C—すると | D—ところが | E—例えは |
| エ、B—つまり | C—ところが | D—すると | E—例えは |

問八、F にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、頭 イ、胸 ウ、腹 エ、肝

問九、——線⑤「平均への回帰の法則」とは、どのような法則ですか。「平均へ」という言葉を必ず使って三十五字以内で答えなさい。

四

次の資料を見て、あとの問いに答えなさい。

資料B：年齢階級別

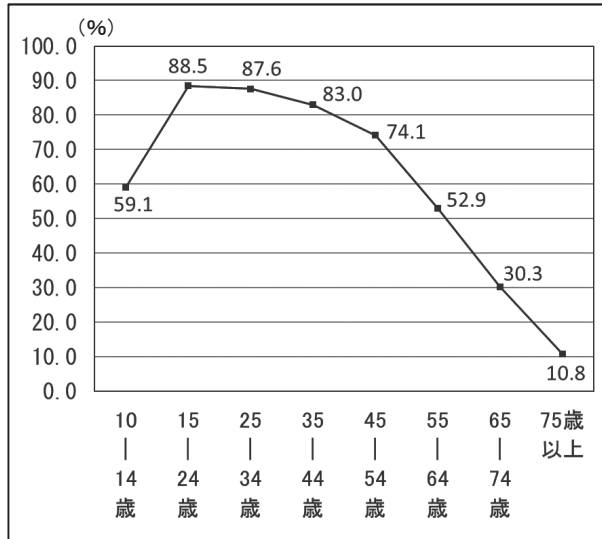
スマートフォン・パソコンなどの
使用時間別の人数 (平成28年)一週全体

	年齢階級 別合計	1時間 未満	1時間- 3時間未満	3時間- 6時間未満	6時間- 12時間未満	12時間 以上
総数	66,835	21,849	26,077	12,601	4,775	1,533
10-14歳	3,202	980	1,393	592	196	41
15-19歳	5,170	664	1,842	1,562	832	270
20-24歳	5,395	503	1,674	1,820	1,014	384
25-29歳	5,513	766	2,176	1,630	695	246
30-34歳	6,202	1,348	2,674	1,495	548	137
35-39歳	6,732	1,945	3,013	1,239	386	149
40-44歳	7,732	2,562	3,450	1,303	303	114
45-49歳	6,966	2,750	2,888	946	292	90
50-54歳	5,420	2,500	2,135	596	160	29
55-59歳	4,445	2,335	1,549	407	119	35
60-64歳	3,552	2,006	1,116	340	72	18
65-69歳	3,338	1,833	1,094	326	73	12
70-74歳	1,676	897	569	165	42	3
75歳以上	1,492	760	504	180	43	5

(単位:千人)

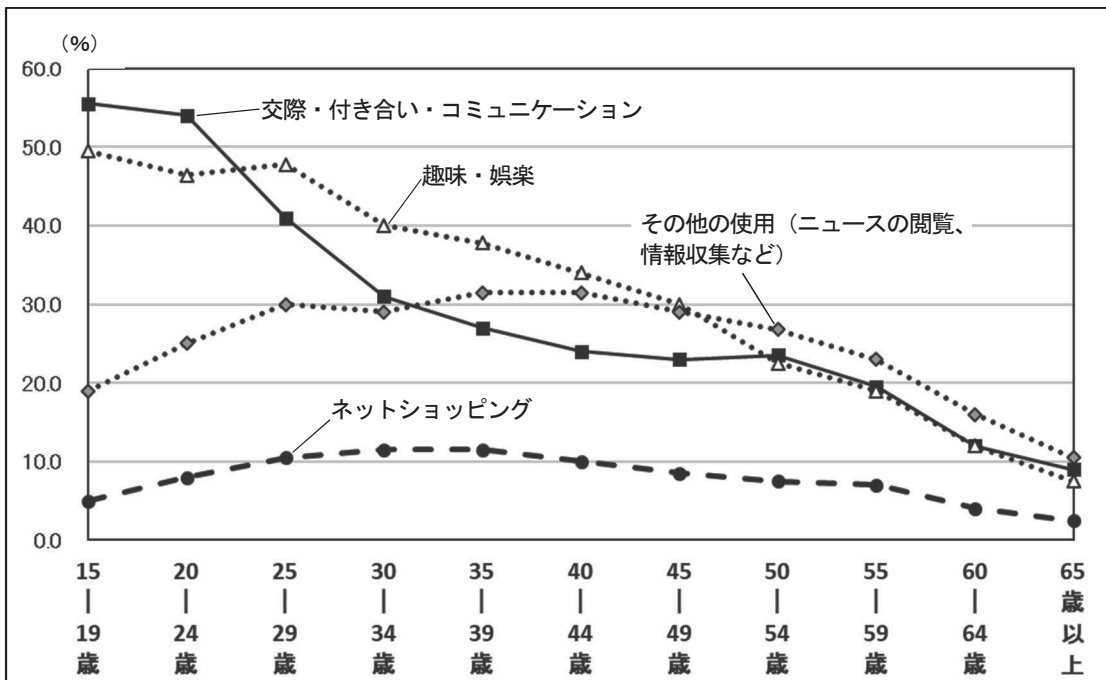
資料A：年齢階級別

スマートフォン・パソコンなどの
使用割合 (平成28年)一週全体



(出典:総務省「平成28年社会生活基本調査」より(以下同様))

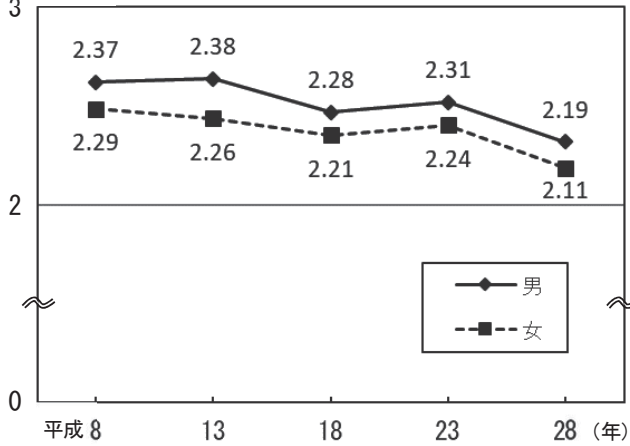
資料C：年齢階級別スマートフォン・パソコンなどの使用目的別行動者率(注) (平成28年)



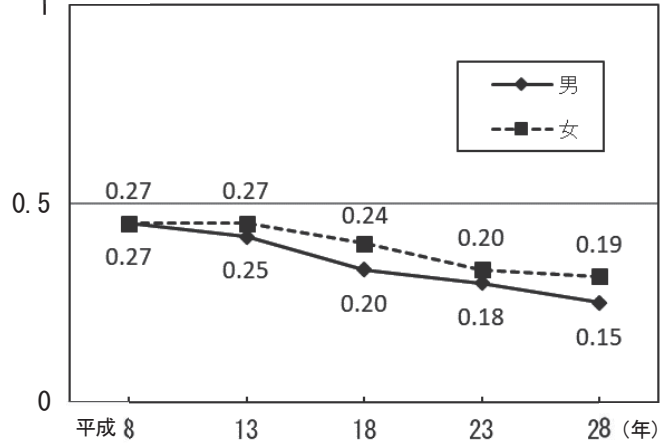
(注)「行動者率」とは、属性別(男女別や年齢別)の人口のうち、1年間の間にある行動(例えば、スポーツやボランティア活動)を行った人の割合を表す。上記の「使用目的別行動者率」は、それぞれの行動の「行動者率」が最も高かった21時～24時の時間帯(平日)のものである。

資料D：男女・行動の種類別生活時間一週全体

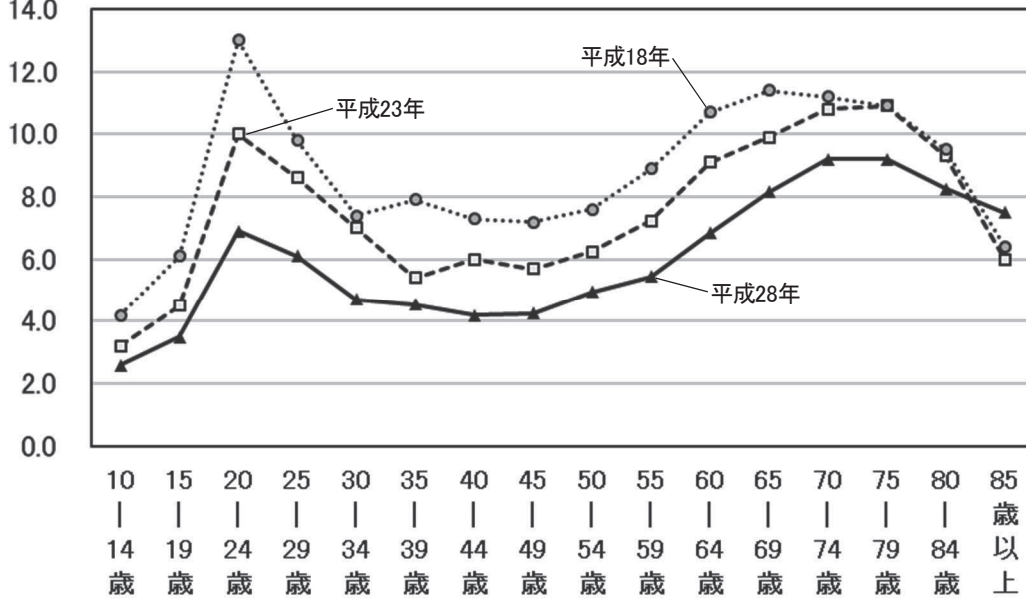
(時間.分) ① テレビ・ラジオ・新聞・雑誌 (平成8年~28年)



(時間.分) ② 交際・付き合い (平成8年~28年)



(%) ③ その他の人(家族、学校、職場以外)との交際・付き合いの行動者率 (平成18年~28年)



問 一、資料A～Cから読み取れることとして適当でないものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア、スマートフォンやパソコンなどの使用割合は、十五歳から三十四歳では九割近くにまで達しているが、年齢階級が高くなればなるほど割合は下がり、七十五歳以上では一割程度に止まる。
- イ、スマートフォンやパソコンなどの使用割合と使用時間の関係性を見比べると、大体において使用割合が高い年齢階級ほど使用時間が長くなる傾向がある。
- ウ、スマートフォンやパソコンなどの使用時間をみると、一日に十二時間以上という人が全ての年齢階級にわたって分布しており、全体では一五三万人を超えている。
- エ、スマートフォン・パソコンなどの使用目的をみると、年齢階級によって目的ごとの行動者率に違いはあるものの、どの年齢階級も、使用目的は同様の傾向を持っている。
- オ、スマートフォンやパソコンなどの使用割合は、年齢階級が低くなればなるほど使用目的に関わらず増える傾向にあり、特に娯楽やコミュニケーションを目的として使用する傾向が強い。
- カ、十歳から十四歳の年齢階級において、スマートフォンやパソコンなどを六時間以上使用している人の割合は、その年齢階級全体から見ると約4%程度である。
- キ、スマートフォン・パソコンなどの使用目的について、十五歳から十九歳の割合の合計が一〇〇%を超えているのは、回答方法が集計方法に何らかの間違いが生じているからである。

問 二、資料Dや他の資料から読み取れることとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などといった従来型のマスメディアにかける時間は、男女ともに特に変化は見られない。
- イ、二十歳代以下の世代ではSNS等の利用が浸透した半面、直接人と会う交際や付き合いの行動者率はおおむね半減した。
- ウ、新型コロナウイルス流行の影響もあり、直接人と会う交際や付き合いの行動者率は、十年前と比べると全ての年齢層で減少した。
- エ、十年前と比べると、家族との時間を重視する傾向が強くなった結果、若い世代は友人と過ごす時間が減った。

